

2003
2004
2005
2006
2007
2008
2009
2010
2011
2012

つばめの 幸福論

Happiness in Tsubame

2013

2014
2015
2016
2017
2018
2019
2020
2021
2022
2023
2024
2025
2026
2027
2028
2029
2030
2031
2032
2033





はじめに

「まちへの想いが、人を、まちを輝かせる」

「日本一輝いているまち、つばめ」。就任以来一貫して、私が掲げる燕市のビジョンです。

まちが輝くとはどういうことなのかと問われれば、「そこに住む人が輝いている」ということなのだと答えています。

今回、「つばめ若者会議」と銘打ち、未来を担う若者たちに20年後の燕のビジョンを考えてもらいました。彼らに期待したことは、「まちの未来を自分事として考える」ということ。行政に「〇〇して欲しい」「△△するべきだ」というような、ホッシーやベッキーにならないで、「自分はこうしたい!」という主体性を持って、未来を描いてほしいと思っていました。

若者会議のメンバーは、私の期待を超えて素晴らしい成果を生み出してくれました。この本は、彼らが本気になって考えてくれた燕のしあわせのあり方であり、それらを達成するためのアクションプランです。「つばめの幸福論」と名付けられた未来ビジョンは、参加した一人ひとりの主観的幸福感から、まちという人が集まりともに生きる集合体の幸福論へまとめられています。

これら幸福論をまとめるにあたって、公式ワークショップ8回に加え、チームで何度も自主的に集まって議論を重ねたと聞いています。アクションプランの発表会では、堂々と自分のチームのアイデアを発表する姿が、本当に輝いて見えました。若者会議をやってよかったと心から思った瞬間です。

まちを自分事として考える。そして、自分事として行動する。自ら動き出す人は、本当に輝いています。ぜひ皆様も、この本を読んで一緒に燕市の未来を考え、自分事としてとらえてほしいと思います。そして一緒に、燕市を日本一輝いているまちにしていきましょう!

2014年 春

燕市長 鈴木 力



これから巣立つ

この幸福論は「20年後の燕市はどんなまちを目指すべきか？」というテーマに向き合ったつばめの若者たちが、自分たちの中で感じている「幸福」を一人ひとり持ち寄り、そこから時間をかけて、「幸福」の条件のエッセンスを抽出し合って、生み出されたものです。

私たちの、これから20年後の日本の未来は、世界に先立ち、かつて人類がこれまで経験したことのない超高齢社会に突入していき、向き合っていかなければならない社会問題が、多く表出してくると言われています。その中で、これらの幸福論を実現するためには、私たち一人ひとりが、「ミッション」に向き合い、協力し合う必要があります。

社会問題の解決を目的として収益事業に取り組む「ソーシャルビジネス」の概念を提唱して、2006年にノーベル平和賞受賞をしたムハマド・ユヌス氏は、若者たちに向かって、「ソーシャルビジネスの本質は、創造性と挑戦です。いままで誰も思いつかなかった手法で解決不可能だと思える問題にぶつかることなのです。……人間の脳の可能性は無限大です。その能力をどう使うかが、皆さんのチャレンジになります。世界の人類のために問題解決に取り組んでください」と促しています。

君たちへ



20年後に「つばめの幸福論」が文字通り、実現するためには、今から、つばめの若者たちが、「創造性とチャレンジ精神」を結集させて、これから襲ってくる社会問題やミッションに立ち向かい続ける必要があると感じています。

「できること」を他者に委ね、「求められること」を拒否し、「やりたいこと」だけに時間と労力を費やすのではなく、私たち、ひとりひとりの「やりたいこと」「できること」「もとめられていること」をうまく組み合わせ、実行することで、人と人とのつながりが機能し、「つばめの幸福論」が実現できるのではないのでしょうか。

この本はこれから燕を巣立つ中・高生たちに向けてつくりました。これから巣立つ皆さんは、言うまでもなく「無限の能力と可能性」を持っています。皆さん一人ひとりが持っているその強みを「ミッション実現」に活かされることで、皆さんとまちが、輝く燕市になると確信しています。

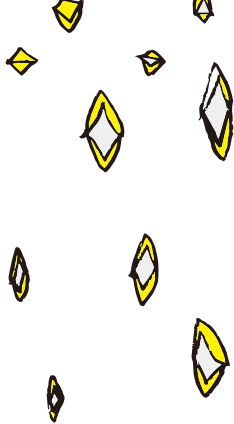
この「つばめの幸福論」が、皆さんと一緒に、「しあわせなひとをふやすまちづくり」に向けてのアクションを起すきっかけになってくれればと願っています。

2014年 春

つばめ若者会議
代表 平出 明彦

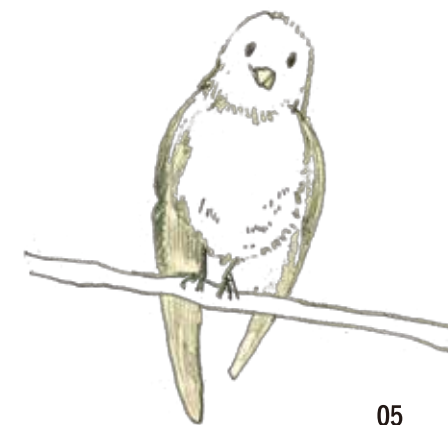


Content



01	はじめに
02	これから巣立つ君たちへ
06	しあわせの風景
16	つばめの幸福論 「しあわせな人をふやすまち。」
18	ふつうに、くらせる、しあわせ。
20	つばめらしさが、あふれている。
22	こどもの笑顔をまんやかに。
24	つながって、ありがとうがめぐるまち。
26	わたしが輝くと、まちも輝く!
28	未来を語り合うことは、まちを愛すること。
30	わたしたちの生きる時代
32	Issue1 人口減少
34	Issue2 年齢構成
36	Issue3 超高齢化

38	つばめ若者会議 2013 アクションプラン
40	子育てチーム「HUG+ はぐたす プロジェクト」
42	食チーム「つばめまんまパワー〜母ちゃんから子どもたちへ〜プロジェクト」
44	スポーツチーム「SMART プロジェクト」
46	イベントチーム「大燕皆プロジェクト」
48	ものづくりチーム「燕屋旅館プロジェクト」
50	起業支援チーム「289 DO - MA プロジェクト」
52	マップチーム「燕魅力発信マップ作成プロジェクト」
54	場づくりつながりチーム「つばめ一大ファミリープロジェクト」
56	看取りチーム「終の住処 燕 プロジェクト」
58	つばめ若者会議のつくり方
68	修学旅行
72	Great History Tsubame
78	参考図書
80	メンバー





しあわせの風景

Landscape of happiness

稲穂と夕日

稲穂が黄金に輝き、夕方の風が涼しくなるころ、収穫の季節を迎える。豊穰な大地と先人たちのたゆまぬ努力の賜物に、自然と感謝の気持ちが湧き上がる。



萬燈

戸隠神社春の例大祭「萬燈」。お玉と呼ばれる少女の踊り子が笛や太鼓に合わせて軽やかに踊り、かつてのお玉が、目を細めて見守る。世代から世代へ、祭りのリズム、まちのリズムが受け継がれていく。



天神講

毎年2月25日は、学問の神様菅原道真を奉る天神講。燕の天神講は、砂糖でできたお菓子をお供えするのが習わし。天神様や犬、果物など、淡い色彩をまとった素朴な表情は、こどもたちの未来を祈る、幸せのカタチ。



背脂とラーメン

「やっぱり帰ると食べたくなるのよ」。東京に行ったあの娘が言う。工場への出前の品として独自に発達した燕ラーメンは、今や燕市民のソウルフード。舌が憶えている、故郷の匂い、故郷の温かさ。

工場

カシャンカシャンカシャン。プレス機で洋食器を型抜く音。カンカンカン。銅を叩いて伸ばす音。どこからともなく金属音が聞こえてくるまち、燕。「コウバ」の風景は、燕の日常であり、世界につながる入口。職人魂がこのまちをつくった。その証が今日も響いている。

真夏の始まり

田んぼの若い稲と抜けるような青空に出会うたびに、
夏休みの思い出がよみがえる。開放感とせつなさが交
差する季節を経験して、みんな若者へと成長していく。

大河津分水とその周辺

頻発する流域の洪水から耕地をまもり、民の暮らしを安泰にした大河津分水。厳しい自然環境に対して、そこに住む人々の幸福の追求と英知が見事に融合し、今の風景を織りなしている。